十八世紀ドイツの子どもの本(5)

クリスティアン・ゴットヒルフ・ザルツマン

『かにの本』

佐藤　茂樹

子は親を見て育つ

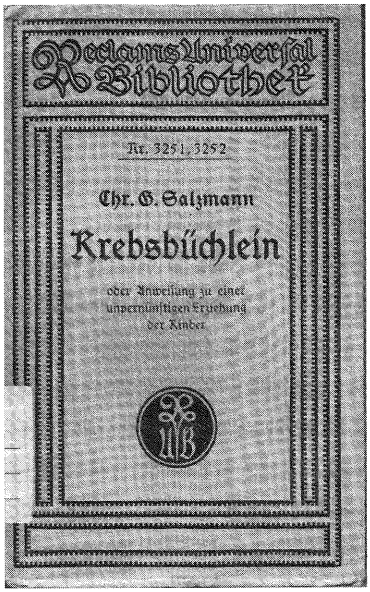
この辺で少し視点を変えて、今回は親に宛てた子どもの教育の本に目を向けてみましょう。取り上げるのは、クリスティアン・ゴットヒルフ・ザルツマン（一七四四―一八一一）の『かにの本　もしくは無思慮な子育ての手引き』（一七八〇）と題する本です。もともとは別のタイトルで出版されましたが、こちらのいわば愛称で読者に親しまれるうちに、正式なタイトルとして表記されるようになったという経緯があります。それにしても『かにの本』とは奇妙なタイトルと思われる方も多いことでしょう。その名の由来は、小川に遊ぶ四匹の蟹の親子が扉絵に描かれていたことにあるのですが、さらにこの蟹の親子も元をただせばイソップの「蟹とその母」という寓話に遡ります。そっくり引用すると、教訓の付いたこんな話になります。

蟹のお母さんがその息子に「横這いをしてはいけませんよ、また脇腹をじめじめした岩にこすりつけてはいけませんよ。」〈と言いました〉。と、その息子は「お母さん、教えていらっしゃるあなたが真直ぐ歩いて下さい、そうしたらあなたを見てそうなりたいと思うでしょう。」と言いました。

これは、人を非難するものは真直ぐ生き、また歩いて、そしてその時に同じようなことを教えるのが至当だということなのです。

（岩波文庫版『イソップ寓話集』山本光男訳）

ザルツマンは、この息子の言葉をラテン語で扉絵の下に引き、自分の本の銘にしています（ただし、〈お母さん〉を〈お父さん〉にしてあるところは、啓蒙の時代に生きるこの著者の立場を象徴的に表しています）。この寓話のモットーを、子どもの感情や性格や行動を様々に損なってしまうエピソードに仕立てて、親たちの無思慮や思い込みの顛末を訴える本、それがザルツマンの『かにの本』なのです。「皆さんの目にあまる子どものその欠点や悪癖が、皆さん自身でつけさせたものだったとしたならば、どういうことになるのでしょうか。……皆さんのほうであらかじめある欠点を与えておきながら、やがて子どもがそれをうまく覚えたからといって、そのために子どもに罰を加えようというのは残酷ではないでしょうか」という序言の一節は、この本の姿勢を明確に表すものと言えましょう。こうしてみると、『かにの本』



というタイトルは、この本の内容とスタイルを短い言葉に集約して、とてもしっくりくるものと納得されるのではないでしょうか。

逆説的な子育ての手引き

この本には三十六篇の子育ての〈方法〉が収録されていますが、そのすべてがマイナスの結末を持つ話に仕立てられています。言うなれば、この本は「子どもをだめにする」手引き書なのです。見出しを幾つか拾ってみましょう。

子どもが親を信用しないようにする方法
子どもに兄弟を憎ませ、しっとさせる方法
子どもが他人の不幸をよろこぶようにする方法
子どもの人間愛の心を枯らす方法
子どもに復讐心をいだかせる方法
子どもを芸術や科学から遠ざける方法
子どもをわがままにする方法
子どもをうそつきにする方法
子どもに人をそしる習慣をつけさせる方法
子どもを不平家にする方法
子どもを強情にする方法
向上の意欲をなくさせる方法
……

まさに反面教師の見本市といった観があります。そして例えば〈子どもをうそつきにする方法〉という見出し

の下には、さらに「子どものうそをおもしろがって、それをほめなさい」とか「子どものいうことを何もかも信用しなさい」とか「子どもが本当のことを白状したときに、罰を加えなさい」といった小見出しが続いて、幾つかのエピソードが語られます。

〈子どもにきらわれる方法〉のうち「子どもが〝ひどいしうちだ〟と思うようなことをしてやりなさい」という小見出しには、四つのエピソードが当てられていますが、その一話を要約して紹介しましょう―

ある女の子がきれいな花の咲いているのを見て、花束を作って母親を喜ばせたいと思い立ちます。そして勇んでそれを渡そうと駆けつけるのですが、気がせいているせいでつまずいて転んで、大事なお皿を割ってしまいます。動転してただ母親の名を呼ぶのが精一杯のその子を待っていたのは、事情をたずねる言葉でもなければ、けがを慮る言葉でもなく、有無を言わさぬ頭ごなしの叱責でした。まして、事の発端となった気持ちなど汲んでくれる気配はありません。女の子はその理不尽さに憤り、「そうして、おかあさんのために花たばをつくってあげるといったやさしい考えは、二度とおこしませんでした。」

子どものときにこういう思いをした、親としてこういう対応をしてしまった、という経験を持つ人は多いのではないでしょうか。しかも、子どものときに親にこういう思いをさせられながら、自分が親になったときには子どもにこういう対応をしてしまったという具合に、自分たちの体験を交互に繰り返しているのが実情かも知れません。

もうひとつ、子どもに芽生えた新鮮な外界への関心を摘み取ってしまう話を紹介しましょう。〈子どもを芸術や科学から遠ざけてしまう方法〉から「自然に対する子どもの興味を、できるだけわきへそらせなさい」というエピソードです―

街中に住むある男の子が、父親に初めて野原へ散歩に連れて行ってもらったときのことです。目にするものが何でも珍しく、せっせと父親のもとに持ってきては問い

ただすのですが、父親の方は面倒くさそうに、そんなことも知らないのかとか、気持ちが悪いから捨てろとか言うばかりです。道端のあれこれに興味を駆り立てられて、つい歩みが遅れがちになると、こらえ切れなくなった父親はとうとう飲み物と食べ物で釣って、この散歩を切り上げようと試みます。子どもはまんまとこの手に乗ってしまい、途中の一切に興味を失い、早く目的地に着いて約束の食べ物と飲み物にありつくことしか頭になくなってしまいます。このやり方の成果は、絶大でした。大人になってからは、散歩はどうでしたなどと聞かれる度に、道端のすべてを見過ごしにできなかった子どものときとは対照的に、「きょうは暑かったですな。道が悪くってね。ビールの味が格別でしたよ」としか答えない人になってしまったのです。

こんな感じで、身につまされるエピソードが続きます。紹介しだすと限りがないのですが、「しきりに命令して、それが守られたかどうかは気にしないでいなさい」や「しきりにおどしつけて、そのおどしを実行しないようにしなさい」という項では、教育熱心のつもりが自分の言葉の後始末に無責任でいると、結局は人の言葉を軽んじて、世の中に対して高をくくった子どもに育て上げてしまう話などが語られることも付言しておきましょう。

エピソードはすべて、短くて一頁、長くて数頁の会話を含む物語に仕立てられています。著者の指針を一方的に説くのではなく、このように日常のひとこまの物語の形で訴えたところに、この本の構想の特徴を見ることができます。読者も出来合いの処方箋を期待することは許されません。物語を通して気づかされ、考えさせられながら、自分で対処するしかありません。「なぜわたしは自分で子どもを病気にしたといわれるのだろうか。あれほど多くの不愉快な時間の原因となっている子どもの不徳が、どうしてわたしの罪なのだろうか」と自問を重ねながら、事態をつぶさに点検するようになることが願いだと序言にも述べられています。この本は本来大人に宛てたものでありながら、読んでいるうちになぜか子ども

宛ての本だと思ってしまうのは、この構想と語り口の特徴のせいでしょう。具体的な出来事の衣を通して理性的な直観に到るというのは、十八世紀の多くの子どもの本に共通する考えであり、『道徳入門書』をはじめとするこの著者の多く子ども宛ての本も同様の構想で書かれているのです。

〈お化け〉の話はなぜ禁句か

この本のほとんどのエピソードは、二十一世紀に生きるわたしたちにも身近なものです。わがこととして思い当たる例も多いことでしょう。そうした中で、ここに取り上げられることがちょっと意外に感じられるものがひとつあります。それは、〈子どもにお化けを見させる方法〉という一節です。この「お化け」をめぐるテーマは、十八世紀には今日わたしたちが考える以上に深刻で、当時の代表的な児童書はほとんどこのテーマを取り上げています。子どもの教育は、この問題と正面から対峙しなければならなかったようです。

つまり、「お化け」の存在を信じ、暗闇を怖がるという問題は、単に個人的な性格の弱さ、臆病さでは済まされない悪徳と見なされていたということなのです。これは事態を直視し、物事の因果関係を理性的に把握できないから生じる欠陥であり、〈理性の自律〉という当時の市民社会の最大の価値を揺るがすものと考えられていた節があります。この種の臆病こそ、幼少の頃から教育によって正されなければならない欠陥なのです。以前に使った言葉を繰り返せば、その根絶は市民階級の将来にとって「階級的な急務」であったということになります。

例えば、前回取り上げた『新児童の友』には、「幽霊」と題する児童劇が収録されています。この劇では、〈化学的〉手際で幽霊の出現を仕組む悪童たち、引っかかって怖がる大人と子どもたち、それに幼少時からの啓蒙的教育のおかげであらゆる非合理的な出来事に怯まず立ち向かう子どもたち、の三者の攻防が描かれていますが、そこで強調されているのは、この種の臆病は胆力の問題ではないことなのです。大部隊を率いる豪胆な軍人が死

よりも幽霊が怖いと思う一方で、見かけに囚われずトリックをやすやすと見破るのはまだ小さい女の子の役割です。そしてそれができるのは、父親による理性的な教育の賜物だと語られます。こうした描写は、この一作にとどまりません。

今でこそ、たかが〈お化け〉と思うかもしれませんが、『かにの本』も意外にこんなところに十八世紀の著作という時代の刻印を帯びているわけです。

ザルツマンの学校

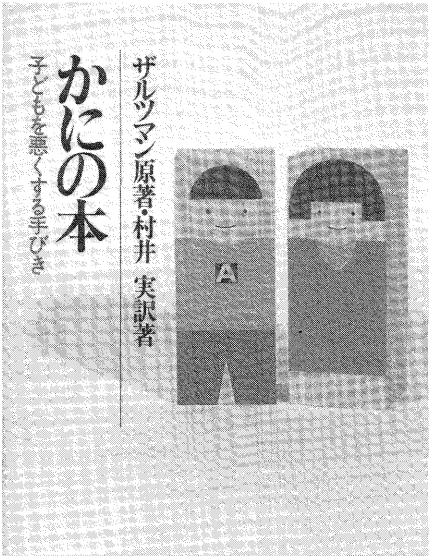
ザルツマンは、イエーナ大学で神学を学んだ後、一七六八年にエアフルト近郊の町で牧師の職に就きます。一七八一年には、デッサウの汎愛学舎で典礼執行者と宗教の教師を務めます。『かにの本』の出版の翌年のことです。この学舎は汎愛主義的教育機関の嚆矢とも言えるもので、すでに紹介したカンペ、シュンメルをはじめとする十八世紀ドイツの教育の代表的人物たちが何らかの関わりを持ち、離反したり理念を継承したりしながら、独自の道を開始する出発点としたところです。そしてザルツマンもここを経て、一七八五年にシュネッペンタールというところに学校を創設することになります。

ザルツマンの学校の特徴的な点は、身体の鍛錬を重視したことです。前回取り上げた『新児童の友』にも、水浴の効用を論じ合う場面で、ザルツマンの学校での水浴に触れた箇所があります。それによると、暑い日盛りはもちろんのこと、雨の日やクリスマスの時期の氷が張った池でも生徒たちが水浴をする様子が伝えられています。もちろんそれは日頃のたゆまぬ鍛錬の成果の驚嘆すべき例外として報告されてはいるのですが、それでも嫌がる生徒たちを強制的に水中に追いやるのではなく、むしろたっての願いを聞き入れてのことであると付け加えられています。このような取り上げられ方から見ても、すでに同時代の教育関係者の目にも、ザルツマンの学校教育は他と一線を画した特異なものと映っていたことは明らかです。この学校の生徒の中からは、後年、ドイツの体操の父とも称される人物さえ出ています。

日本に紹介された『かにの本』

ザルツマンは、日本の教育界でもわりと早い時期から知られており、この『かにの本』も明治三十七年には『我子の悪徳』という書名で紹介されたということです。

ちなみに、この『かにの本』はこれまでの連載で紹介した十八世紀の本のうち唯一日本語でほぼ全容を知りうる書物です。あすなろ書房という版元から教育学者の故村井実氏の翻案（一九九七年二十三刷）で出版され、今でも容易に入手することができます。氏はこの本を単に翻訳してよしとするのではなく、原著の精神を尊重しながら、名前の表記や生活背景など様々な工夫を凝らして今日の日本の読者にも親しめる形にしています。十八世紀の書物を異なる時代の異なる文化背景を持つ読者に伝えるには、この方法はひとつの見識だとわたしは思います。この度のこの紹介でも、氏の用いた言葉をできるかぎり利用させて頂きました。



氏の日本語版も、今のわたしたちには多少世相離れした感は否めませんが、教育を論じた書物はこれくらいの違和感があった方がむしろよいのではないかとわたしなどには思えます。少なくとも、この本にハウ・トゥ的な即効性を求める勘違いはそれで避けられると思いますし、むしろ多少の違和感があればこそ、その内容と自分なりに対決して自分を取り巻く個別的な状況に即応させた生かし方もできるのではないでしょうか。

（関東学院大学）